

## 児童の主体性を育むキャリア教育のアプローチ —地域の課題を考えさせる単元開発を通して—

教職実践専攻・ミドルリーダー養成コース  
学籍番号 17GP408 氏名 長谷川 泰樹

### 1 本研究の課題意識

#### (1) 勤務校の現状と課題

本校は、全校児童数 42 名に対して教員が 10 名配置されている小規模な小学校である。児童一人一人の特性を全教員で共有し、少人数であることを活かして、学年・学級の枠を越えて育てていこうとする意識で教育活動にあたっており、教員と児童一人一人との関わりは中規模以上の小学校に比べて深いと言える。そのため、個に応じた指導を充実させることができ、児童も教師の指導を素直に受け入れているので、大きな生徒指導上の問題はほとんど起こらない。

本校児童は、教師の側から示される「やるべきこと」に率先して取り組もうとする自主性のある児童が多いが、逆に言えば「やるべきこと」を示されない限り行動できないという側面を持つ。例えば、あいさつをすることが、予め分かっている場面では堂々としているが、状況に応じたあいさつが必要な場面では、声が小さくなったり自分からあいさつをしなかったりする姿が見られる。本校児童は「言われたことを率先してやろうとする自主性は育っているが、自らの判断で決定し行動する主体性は十分育っていない」ことが課題であると言えるだろう。この点については、教育課程編成会議で毎年重点事項として挙げられ、平成 29 年 9 月に本校の教員を対象に行ったインタビューでも話題に上ったことから、教員間で共通の課題として認識されていると言える。

また、本校には複式学級が 2 クラス設置されている。複式学級では、学級担任が 2 学年に対して同時に授業を展開するので、「児童が直接教師と学習を進める指導形態」（直接指導）と「直接指導を受けられない学年の児童が自主的に学習を進める指導形態」（間接指導）を組み合わせる。間接指導では、児童は自ら考えながら学習しなければならない。さらに小規模校のため、特別活動において高学年児童には様々な役割が与えられ、一人一人がリーダーとなって活躍することが求められる。児童にとって負担となる面が確かにあるが、全員が何かしらの形で学校のリーダーを経験できることは、中規模以上の小学校にはない特色であると言える。本校の課題として認識されている「主体性の育成」は、複式学級を含む小規模校という本校の条件からみても重要な課題である。

#### (2) 主体性のある子ども像の設定

梶田（2016）は、教育学の立場から、将来の自立を考えれば「最終的にはその子自身が、自分の責任と努力で、自分自身の「自己」としてのあり方を形づくっていかねばならない」と述べている。教師は、常に「教えること」に意識を向けがちであるが、教育とは、究極的には「子ども自身が自分の責任と努力で自らを形づくる」ことを目指す営みである。主体性の育成は、教育の正に根幹にあるものだと言えるだろう。その最初の段階として、小学校における主体性を育む指導を考えていく必要がある。

では、どのようにして主体性を育てていけばよいのだろうか。浅海・野島（2001）は、

臨床心理学の立場から、次のように述べている。「行動を起こすための、内発的なものである自発性が最初であり、そこから、行動を起こす中での色々な課題解決のために必要な自己決定を行い、それらを自己の中にとどめておくだけでなく、外界に向けて表現するという対社会的な行動が主体性には必要である」。これを踏まえれば、主体性を育成するためには、「行動を起こすこと」「課題解決のために自己決定を行うこと」「外に向けて表現すること」が重要な意味を持つと言えるだろう。

そこで本研究では、目指す主体性のある子ども像を以下のように設定することとした。

#### ＜本研究で目指す主体性のある子ども像＞

- ①自分の判断を、根拠を明確にして伝えようとする
- ②自分の役割を考え、友達と協力しながら進んで取り組もうとする
- ③物事を自分の力で解決しようとする
- ④活動をふり返って次の活動に活かそうとする

#### (3) キャリア教育のアプローチ

主体性のある子どもの育成に向けて、本研究ではキャリア教育に着目する。

平成23年1月31日に出された、中央教育審議会「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について（答申）」によれば、児童が将来、社会人・職業人として自立するためには、各学校段階においてキャリア発達を促していく必要がある。

とどまることなく変化する社会の中で自立的に自分の未来を切り拓いて生きていくためには、変化を恐れず対応していく力と態度が必要であり、未知の知識や体験に関心を持ち、学ぶことの楽しさや新しいことに挑戦する勇気とその価値を体得していくことが求められる。しかし、これらの能力や態度は自然に身に付いたり高まったりするものではなく、意図的・計画的な教育活動が行われることでキャリア発達が促進されていく。その土台となるのが、キャリア教育で育成されるべき基礎的・汎用的能力である。この能力は、相互に関連する「人間関係形成・社会形成能力」「自己理解・自己管理能力」「課題対応能力」「キャリアプランニング能力」から構成されており、本研究で目指す「主体性のある子ども像」に深く関わっている。したがって、基礎的・汎用的能力の伸長を、学校・地域の特色や児童の発達段階に合わせて具現化し、教育活動の中に位置付けることによって、児童の主体性を育てることができると考える。

小学校の教育活動には、キャリア教育に関わる内容が多く含まれているものの、実状として必ずしもキャリア教育を意識した指導がなされているとは言えない。学校教育の中で、何気なく行われていることの中にはキャリア教育の要素がたくさんある。教育活動の中からキャリア教育の要素を見だし、それらを意図的・計画的に取り入れることで、日常生活や将来とのつながりを理解し、「何のためにやるのか」「なぜ必要なのか」を、児童が自ら判断し行動する主体性を育むことにつながるであろう。

以上の理由から、児童の主体性を育むために、本研究では、キャリア教育のアプローチを取り入れていきたいと考えた。

#### (4) 地域の課題の解決を考える単元開発へ

1年次の1月までは、学ぶ内容・学ぶ方法・特別活動の3つのキャリア教育のアプローチで、主体性を育もうと考えていた。キャリア教育の要素を相互につなぎ体系的・系統的な指導へと転換すること（藤田 2014）が、主体性育成に有効だと考えたからであ

る。しかし、1年次2月に、本校教員に研究計画を説明・相談する場において、本研究で目指す主体性のある子ども像、とりわけ③の重要性についての理解は得られたが、具体的な実践については、3つのキャリア教育のアプローチは広がりがあり過ぎ、焦点化することが求められた。

そこで、2年次当初に、どのように焦点化するかを学校管理職とともに検討し、今年度から新たに実施される「三戸町長と語る会」を活かして、地域の課題の解決を考える単元を開発することとした。具体的には、三戸町小中一貫教育の特徴である、総合的な学習の時間・道徳・特別活動を融合した立志科において、5・6年生の複式学級を対象に、単元「町の将来・私たちの未来」を新たに設定した。児童が生まれ育った三戸町の現状を知り、町が抱える課題を見いだし、それを解決するためのアイデアを考え、町の行政を担う三戸町長にプレゼンテーションするという一連のプログラムである。町の将来と自分の未来を関連付け、三戸町民の一人として考える活動を通して、児童の主体性を育むことができると考えた。本研究は、勤務校の現状を踏まえ、地域の課題を町民の一人として主体的に考える活動をキャリア教育の一環として位置付け、児童の主体性を育てようとするものである。

## 2 地域の課題を考えさせる単元の開発

### (1) 三戸町の現状の把握

三戸町の課題を取り上げるにあたり、町の現状について行政の情報を収集した。「まち・ひと・しごと創生三戸町長期人口ビジョン」(2016年10月)によれば、人口減少が大きな問題となっており、移住促進のための政策が行われていることが分かった。そこで、人口減少に焦点を当てさせていきたいと考え、町の住民福祉課に依頼して、1997年から2018年3月までの総人口のデータを提供してもらった。前述の「三戸町長期創生人口ビジョン」の2018年以降の推計と合わせて、総人口の推移と推計のグラフ(図1)及び年齢別人口の割合の推移のグラフ(図2)を作成した。これらのデータから、児童が働き盛りの30代となる2040年には、現在の65%まで総人口が減少していくとみられていること、2040年には65歳以上の割合がほぼ50%に達し、主たる働き手となる15～64歳の割合が40%前半まで減少するとみられていることが分かる。

また、人口減少の背景として自然増減と社会増減があるが、住民福祉課に提供してもらったデータによれば、2014年以降100人前後の社会減が続いていることも分かっている。つまり、三戸町に転入する人よりも近隣の市や県外に転出していく人が多い状態が続いて

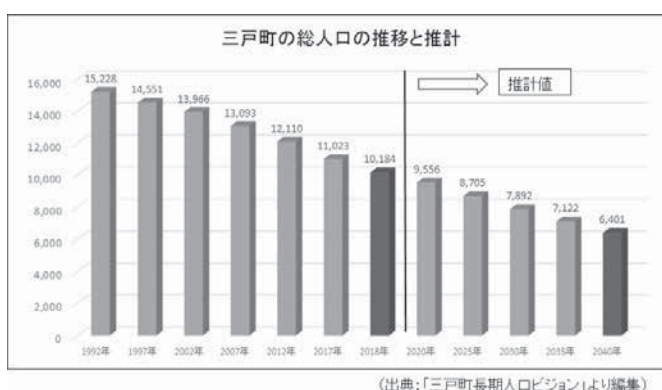


図1 【三戸町の総人口の推移と推計】

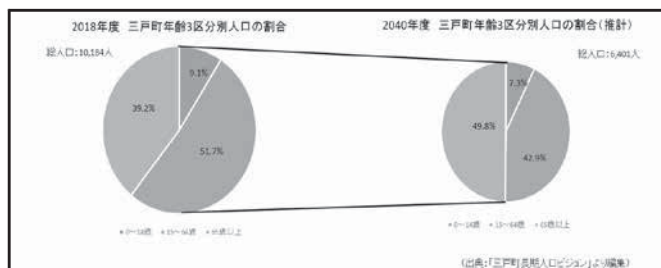


図2 【三戸町年齢3区分別人口の割合の推移】

いるということである。

### (2) 単元指導計画の作成

単元の見通しを持つために、単元指導計画を作成した(表1)。主な学習活動と主体性のある子ども像との関連、さらにキャリア教育が目指す基礎的・汎用的能力との関連を明記した。授業中の児童の発言や行動に着目して、主体性を発揮したかを評価していくこととした。また、実施にあたっては、本学級には特別支援学級(知的障害・肢体不自由)に在籍する児童が2名いるため、特別支援学級担任の2名の教諭とも連携し、チームで指導に当たる体制づくりを進めた。

### (3) ゲストティーチャーの選出

単元指導計画の「つかむ」の段階では、ゲストティーチャーを招くことにした。町外から移住して来た人達から、外から見た三戸町の姿や魅力に感じていることなどを聞くことで、町の将来に対して前向きに考えさせることができると考えたからである。

ゲストティーチャーの選出に際しては、三戸町まちづくり推進課の協力を得ることができた。まちづくり推進課では、移住促進事業として移住についての相談や就労のアドバイスなどを行っており、町外から移住して来た人についても把握している。そこで、本単元のねらいと探している人材を説明して、ゲストティーチャーとして2名(以下A氏・B氏とする)を紹介してもらった。授業者は、あらかじめ、A氏・B氏に「三戸町に来たきっかけ」「実際に住んでみた感想」「三戸町の魅力」などの取材を行った。両名は共通して、「町を活性化するのはそこに住む人達である」という主張を持っており、本学級の児童に当事者意識を持たせる上で重要な契機となると考えた。また、三戸町に魅力を感じて2～3年住んでいることから、外からの視点で三戸町の魅力や可能性について語るができる方々であることが分かった。こうした理由から、この両名にゲストティーチャーを依頼することにした。

## 3 授業の経過と児童の姿

計画では13時間で設定していたが、以下の通り16時間で実施した。対象児童は、5年生の5名(E～Iさん)、6年生の7名(J～Pさん)である。

### (1) つかむ

#### ① 10月16日(火)

まずグラフを提示して、三戸町の総人口は減少傾向にあり、今後も続くとみられていることをつかんだ上で、22年後に今とどんなところが変わっていくのかを、2つのグループに分かれて予想し付箋に書き出していった。初めは、個人思考が中心であったが、「店がなくなるよね(Pさん)」「人がいなくなったら他の町と合併することもあるかもしれないね(Jさん)」など、しだいにグループ内で対話が始まっていった。ただ、児童にとって人口減少と経済的な問題はつなげにくかったため、既習の税金の学習を想起させた。そこから、「学校の物が壊れても直せなくなる(Gさん)」「除雪ができなくなって困る(Eさん)」など自分達の生活に関わるものが次々と出された。特に「学校が無くなる(Kさん)」という意見に対する反応は大きく、「自分達の学校が無くなるのは嫌だ(Nさん)」「自分達が大人になっても残っていて欲しい(Lさん)」などの発言が多く見られた。このことは、より自分達に関わりのある問題としてとらえた場面であると考えられる。授業後の振り返りの記述には、「三戸町の課題を知ったので、それに対

表1【単元指導計画】

時間	段階	・主な学習活動	◇主体性のある子ども像との関連	○基礎的・汎用的能力との関連
3時間	つかむ	<b>10月16日(火)</b> ・人口推移のデータから、22年後に三戸町がどのように変化していくかを予想する。 ・人口が減少するとどんなことが起こり得るのかを考える。 ・人口減少によって、自分達の生活に様々な面で影響が出てくることを理解する。	◇人口減少によって起こることを、自分に関連することとして考える。	○課題対応能力
		<b>10月22日(月)</b> ・ゲストティーチャーの話を聞き、外から見た三戸町の姿を知る。 ・三戸町がもつ魅力について知る。	◇自分達の生活につながるものとして、関心をもってゲストティーチャーの話を聞く。	○人間関係形成・社会形成能力 ○課題対応能力
		<b>10月24(水)</b> ・前時までで気づいたことや考えたことを共有する。 ・みんなで考えていきたいテーマについて話し合う。 ・身近な大人にインタビューすることを知る。 ・インタビューの仕方を確認する。	◇自分達で課題意識を持って、テーマを設定する。	○人間関係形成・社会形成能力 ○課題対応能力
2時間	調べる	<b>10月29日(月)まで</b> ○身近な大人にインタビューをする。	◇町のことについて関心を持って身近な大人にインタビューをする。	○人間関係形成・社会形成能力 ○課題対応能力
		<b>10月30日(火)</b> ・インタビューの結果から、人口減少の原因を考える。 ・その原因を変えるためアイデアを考える。	◇課題意識を持って、自分なりのアイデアを考える。	○人間関係形成・社会形成能力 ○課題対応能力
6時間	解決する	<b>10月31日(水)～11月19日(月)</b> ・「町長と語る会」に向けてプレゼンテーションの準備をする。 ①解決策を考える。…(2時間) ②資料の作成 …(3時間) ③「町長と語る会」のリハーサルをする。…(1時間)	◇根拠を明確にしてアイデアを説明し町の課題を解決しようとする。 ◇積極的にアイデアを共有して深めようとする。 ◇人に伝えたいという気持ちを持って、発表の工夫をする。	○人間関係形成・社会形成能力 ○自己理解・自己管理能力 ○課題対応能力 ○キャリアプランニング能力
1時間	発表する	<b>11月20日(火)</b> ・「三戸町長と語る会」を開く。 ・ゲストからの質疑応答に答える。	◇質問に対して、自分の言葉で応答する。	○人間関係形成・社会形成能力 ○課題対応能力
1時間	深める	<b>11月22日(木)</b> ・人口減少を止めようと思った理由を想起する。 ・町の将来について考えたことの価値について考える。	◇活動を振り返って、次の活動に生かそうとする。	○自己理解・自己管理能力 ○キャリアプランニング能力

する改善策を見つけて、町のために何かをしたいと思った（Oさん）」といったことが書かれており、このことから、自分に関連することとして取り組んでいこうとする意欲が感じられる。

#### ② 10月22日（月）

A氏・B氏には「三戸町に来たきっかけ」「仕事の概要」「三戸町に住んでみての印象」「魅力と問題点」について話してもらった。児童は話を聞くことが主な活動となったが、ゲストティーチャーの話に関心を持ち、「インターネットを使うと色々なことができそうだね（Mさん）」「三戸のりんごが外国で人気があるって知らなかった（Jさん）」など意見交換する児童も見られた（写真1）。家でりんごの栽培をしているJさんは、自分の家のことと関連させて聞いていたようである。授業後の振り返りの記述には、「自分では町には良い所がないと思っていたけど、気付いていない魅力がたくさんあると思った（Lさん）」「もっとたくさん三戸町の良さや魅力を知り、たくさんの人に三戸町のことを知ってもらいたいと思った（Eさん）」等といったことが書かれていた。実際に町興しに取り組む大人の話聞いたことが、児童の意欲を大きく高めたと考える。



写真1【意見交換する児童】

#### ③ 10月24日（水）

前時までの活動を想起させた上で、グループで三戸町の課題について話し合った。「人口減少が課題」という発言が多く、その理由として「働く人が減ると税収が減る（Kさん）」「暮らしに影響が出てくる（Hさん）」等が挙げられた。こうした反応を受け、人口減少を解決していくためにどんなことをしていけばいいかの話し合いに入っていた。ゲストティーチャーの話から、「私達は三戸町の魅力を伝えきれていないのではないかと（Oさん）」「自分達も知らないが、大人達も町の魅力を知らないのではないかと（Mさん）」という疑問を抱いていた児童達は、「もっと町の魅力をPRする（Fさん）」「町のおいしい食べ物を県外や外国に伝えて販売する（Nさん）」等の意見を活発に発表し、「三戸町の良さを自分達が知り、県外や他市町村の人達にPRすることで、何人かでも三戸町に興味を持ってくれる人が出てくるといい」という想いが共有されていった。この時間の最後には、児童自身の言葉で、自分達が探究していくテーマを「人口減少を少しでも止めるためには、どうすればいいだろう」に設定した。「少しでも」という表現には、「人口を増やすことは難しいかもしれないが、それでも…」という現実を踏まえた強い想いが感じられた。単元全体を振り返ってみると、この時に、児童自身が課題意識を持ってテーマを設定できたことが、この後の児童の主体的な取組を支える大きな要因になったと考える。

#### （2）調べる

#### ④ 10月30日（火）

本時の前に、児童は身近な大人（家族）に「町の人口が減っていることをどう思うか」「人口が減るのはどうしてだと思えるか」など6項目についてインタビューを行った。インタビューは計画段階から想定していたが、授業の実際の流れの中で、前時の「大人達も町の魅力を知らないのではないかと」という児童自身の疑問を受ける形で展開すること

ができた。中には、2人の大人にインタビューをした児童もおり、関心を持って取り組もうとしていることがうかがえた。

本時の冒頭で、児童は互いのインタビュー結果を見て、「大人達も人口減少が課題だと思っている」「大人達も三戸町には魅力が無いと感じている」ことを把握した。ここで、授業者は、児童に「三戸町をどんな町にしていきたいか」という問いを投げかけ、話し合わせようとした。しかし、児童からは「楽しい町」「にぎやかな町」「活気のある町」等の漠然とした意見が出るだけで、話し合いは沈滞した。授業後に本時の展開を省察して、このような状況に陥ったのは、授業者が、児童が自ら決めたテーマ「人口減少を少しでも止めるためには、どうすればいいだろう」からずれた問いによって授業を進行しようとしたことが、児童の思考の流れを遮ってしまったからではないかと考えた。児童の思考を大切にしながら探究的な活動をしていくためには、核となる問いをぶれさせてはいけないと改めて認識した。この反省を受けて、次時の構成を練り直した。

⑤ 10月31日（水）

本時では、まずインタビューの結果に戻って、改めてそこに含まれる人口減少の原因を検討した。そして、「働く環境が少なく、その結果町外や県外に出て行ってしまっている（Nさん）」「大人も町には魅力が無いと感じているから出て行ってしまおう（Oさん）」「自分のやりたい仕事が少ないからだ（Iさん）」等の意見が出たことを踏まえ、それでは、そうした原因を変えるためにはどうすればいいか、グループで話し合う展開とした。児童からは、「三戸町のりんごを外国や県外に売る（Hさん）」「子ども達が新しい商品をつくって売る（Oさん）」「空き家を利用して仕事場にする（Fさん）」「インターネットで農業体験を広める（Mさん）」「県外から色々な職業の人達を連れてきて仕事を増やす（Kさん）」等、様々なアイデアが活発に出された。友達との対話を通してアイデアを発展させた児童もいた。例えば、「町の特産品を売る」と「おいしい食べ物をPRする」を合わせて、「町の特産品を使った新しい食べ物を開発してPRする（Nさん・Oさん）」等である。児童は、「少しでも人口減少を止めるためには、どうすればいいだろう」というテーマを念頭に置いて、自分なりのアイデアを意欲的に考えることができた。

（3）解決する

⑥ 11月2日（金）

3人ずつ4つのグループを作り、相談しながら前時に皆から出たアイデアを整理した。児童はアイデア一つ一つを、グループでじっくりと相談しながら整理し、その理由を発表した。具体的には、「どちらも町のPRに関することだけど、インターネットを使ってPRするのと〇〇体験でPRするのではちょっと違う（Hさん）」「空き地をどのように活用するかで分けてみた（Gさん）」等である。根拠を明確にして説明し、町の課題を解決しようとする姿が見られた。アイデアの意図が分かりにくい場合には、お互いに質問し合うことで、アイデアを共有する姿もあった（写真2）。



写真2【アイデア共有する姿】

計画では1時間で行うこととしていたが、児童が意欲的に活動しており、最後まで児童の力で解決させたいと

考え、次時も継続して行うこととした。

⑦ 11月5日（月）

前半は前時の活動を継続し、全てのアイデアが模造紙上にまとまりごとに区分された。

次に、まとまりごとに名前を付けていった。この活動は、時間的な関係から、応答の中で教師が児童の考えを引き出して進めた。児童は、積極的に意見を出し、それぞれのまとまりに「特産品をPR」「加工品をPR」「空き地の活用（楽しめる場所）」「イベント企画」「店を増やす」等の名前を付けた。

⑧ 11月6日（火）

前時に整理したアイデアの中から、各自が特に良いと思ったものを選び発表し合う活動を行った。発表前に、ワークシートに各自の考えをまとめたが、どの児童も、そのアイデアが良いと思う根拠を明確に書いていた。「子ども達で考えるから色々なアイデアが浮かんでくる（Oさん）」「イベントを企画すると三戸町に人が来てくれると思うし、来てもらうことで三戸町の良い所や食べ物を知ってもらうことができる（Pさん）」等、具体的なものもあった。発表する際には、町長と語る会に向けて相手の顔を見て発表するように促した。全員ではないが、友達の顔を見て発表しようとする児童が数名見受けられた。本時の最後に、それぞれが良いと思うアイデアをもとに、プレゼンテーションに向けて、以下の4つのグループを編成した。

グループA … 「イベント企画」	グループB … 「〇〇体験」
グループC … 「新商品の開発・販売」	グループD … 「空き地・空き家の利用」

⑨～⑭ 11月9日（金）～11月19日（月）

本時から6時間をかけてプレゼンテーションの準備を進めた。まず、グループごとにアイデアを深め、具体化する活動に取り組んだ。授業者は、「何のために・誰が・誰に・どこで・いつ・何を・どのように」するのかを考えるよう促した。

<グループA…「イベント企画」>

グループAは、5年生と特別支援を受ける児童の構成となったため、教員間で事前に打ち合わせ、特別支援学級担任C教諭に支援に入ってもらうことにした。C教諭にアドバイスをもらいながら、夏と冬のイベントを考えることができた。冬は雪の多さを利用した雪合戦、夏は三戸町を巡るスタンプラリーである。また、三戸町では11匹のねこを町興しに活用していることを生かして、雪合戦のチームを11人にすることやスタンプラリーのチェックポイントを11箇所にするなどの工夫が見られた。

<グループB…「〇〇体験」>

グループBは、農業や伝統的な食べ物の体験を通して、三戸町をPRすることをねらっていた。りんごの栽培体験では、一人一本のりんごの木の栽培をし、収穫したりんごは自分のものになること、稲作体験では田植えや稲刈り、農業用機械の操縦等の具体的な体験の内容を考えることができた。りんごの栽培体験や稲作体験は児童が日常生活の中で経験をしていることであるため、自分達の経験を生かして考えることができた。プレゼンテーションの資料は、よりイメージが伝わるように、写真を添付する等の工夫が見られた。



#### <グループC…「新商品の開発・販売」>

グループCでは、新商品の開発に向けて、「考えるのは三戸町の子ども達だが、それがすでにあるものか、商品化することが可能かは、町の大人（役場・町のサークル活動等）の力を借りる」といった現実的な考えが見られた。今ある特産品を使った新商品の案を考え出そうとしたが、「三戸町の特産品は何か」がはっきりと分からなかったため、インターネットで調べたり特別支援学級担任D教諭に質問したりしながら、自分達で新商品の案を考えることができた。例えば、「りんごやジョミ（ガマズミ）のアイス」「11匹のねこの弁当箱」「11匹のねこの靴下」等である。

#### <グループD…「空き地・空き家の利用」>

グループDの児童は、冒頭、空き地を使って農業用地をつくることにだけ意識が向いていたため、授業者が声をかけ、ゲストティーチャーの話やインタビューの分析を踏まえてアイデアが出されてきた過程を思い出させ、目的は働く環境をつくることにあったことを確認した。すると、児童はゲストティーチャーの話にあったサテライトオフィスについて考え始め、「空き家があってもインターネットが使えるようにならないと、サテライトオフィスとして活用できない（Fさん）」「いつでもサテライトオフィスとして活用してもらうためには、インターネットを使える環境を整えておく必要がある（Mさん）」等、農地利用だけでなく、サテライトオフィスに必要なものを自分達なりに考えることができた。

ある程度それぞれのグループで考えが深まったところで、他のグループが考えている内容を見てもいいと伝えると、互いのアイデアをつなげて「空き地を〇〇体験の会場として使えたらいいね（Hさん）」「雪合戦の時に新商品を売るのはどうだろう（Lさん）」等、積極的にアイデアを共有して深めようとする姿が見られた。プレゼンテーションの資料の作成と平行して、原稿の作成や練習も進められた。練習は、昼休み等を利用して自主的に行われ、お互いにプレゼンテーションを聞き合ったり、自分から教員にアドバイスを求めたりしていた。児童は、自分達が考えてきたことをしっかりと伝えたいという気持ちを持って、取り組んでいたと言えるだろう。

#### （４）発表する

##### ⑮ 11月20日（火）

三戸町長・三戸町教育振興会会長・三戸町教育委員会の職員の計4名を招き、町長と語る会が行われた。児童は、自分達が町のために考えてきたことをしっかり伝えようと、声の大きさや速さ、相手の顔を見て話すこと等を意識しながらプレゼンテーションした。予め準備した内容を語るだけでなく、「PRするのに何を言えば効果的だと思いますか」という質問に、「CMを流す（Gさん）」「You Tubeで町の動画を配信する（Hさん）」と答える等、自分なりの考えを語ることができた。また、町長の講話にも真剣に耳を傾け、授業後の振り返りの記述には、「日本一大きい靴下を作るという意見を町長さんから聞いて、町の人達みんな協力して作ってみたいと思った（Eさん）」「町の人みんな人口減少を止めたい（Nさん）」「町長さんからもらったアドバイスを参考にして、考えをもっと深めていきたい（Lさん）」「町長さんのアドバイスを参考にして、これから町のことをさらに考えていきたい（Pさん）」といったことが書かれていた。

## (5) 深める

## ⑩ 11月26日(月)

町長と語る会についての町長や本校校長の評価、新聞記事に紹介されたことを児童に伝えた上で、活動全体を振り返らせた。児童は、「自分達が考えたことが実現されればやりがいを感じるし、また考えてみようという気持ちになる(Mさん)」「大人も子どもも皆が協力すれば新しい取組を実現できるかもしれないと思った。これからも町のために、自分にできることをしていきたい(Oさん)」といった感想を述べていた。自分達でテーマを設定し、それを解決するためのアイデアを自分達なりに考えてプレゼンテーションしたことの価値を自覚できたのではないだろうか。今後も、町民の一人として町のことを考えていこうとする意欲がうかがえた。

## 4 研究の成果

本研究では、地域の課題を町民の一人として考える活動をキャリア教育のアプローチに立って行い、児童の主体性を育てることを目指した。結果として、児童は、課題の把握からプレゼンテーションに至る過程において、様々な形で主体性を発揮して課題解決に取り組むことができたと言える。

それを支えた要因として、次の3点を挙げることができる。第1に、当事者意識を持たせたことである。自分達が生活する地域の現状を知り、そこから課題を見だし、その解決策を考えたことで、自分達に関わることとして解決しようとする主体性のある姿が見られた。「つかむ」「調べる」の段階を経て、自分達でテーマを設定できたことは、その後の活動に主体的に取り組む土台となった。第2に、自分の考えを根拠を明確にして語り、協力して考えるグループワークを多く取り入れたことである。児童同士の対話が自然と生まれ、正解がない課題に対して意欲的に取り組もうとする姿が見られた。第3に、教師がファシリテーターの役割を強く意識したことである。教師の側から考えを押し付けるのではなく、児童が学習の主体となるように教師の立ち位置を変えたことで、児童の自分達で課題を見つけ自分達の力で解決しようとする姿を引き出すことができた。今回の実践を通して、児童自身の思考を促すために、待つこと、全員の意見を尊重すること、児童に安心・安定を与えること、児童の考えを引き出し・つなぎ・広げることの重要性を学ぶことができた。

今回の研究では、立志科の一つの単元を通して、主体性の育成を試みた。だが、本来、主体性の育成は、一般の教科や特別活動等も含んだ教育活動全般を通して取り組まれるべきものである。今後は、他の教育活動の場面においても、キャリア教育の基礎的・汎用的能力を意識しつつ、主体性の育成に努めていきたいと考える。

## ＜参考文献＞

浅海健一郎・野島一彦(2001)「臨床心理学における主体性概念の捉え方に関する一考察」

(九州大学大学院人間環境学研究所『九州大学心理学研究第2巻』, 53-58)

梶田叡一(1996)『子どもの発達と教育2<自己>を育てる 真の主体性の確立』金子書房, 2-121

三戸町(2016)『まち・ひと・しごと創生 三戸町長期人口ビジョン』

藤田晃之(2014)『キャリア教育基礎論—正しい理解と実践のために—』実業之日本社, 53-101

文部科学省(2011)『小学校キャリア教育の手引き<改訂版>』教育出版